

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

『旅行カバンをもつ女の子』

～イストリアからの脱出とフォイベの虐殺～

深草 真由子

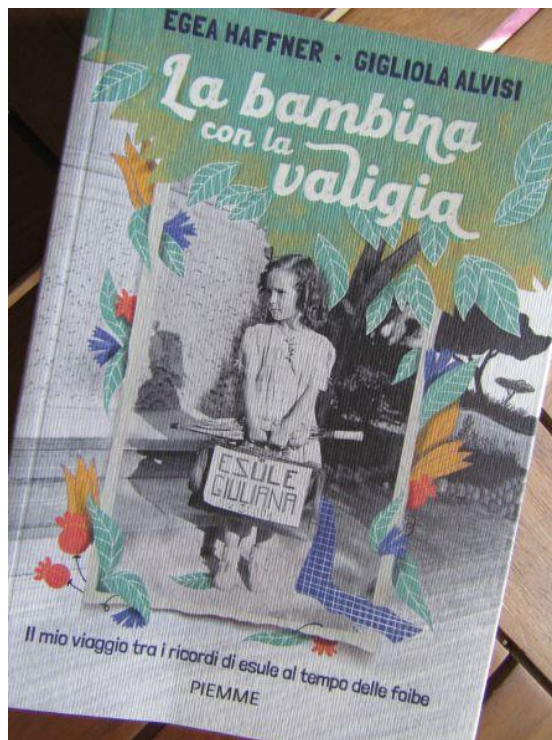
なにかを探るように遠くを見つめる、まだ幼い子どもを写した白黒写真がある。第二次世界大戦がうんだ悲劇のシンボルとしてイタリアではよく知られた一枚である。

つやつやの髪にカールを入れ、上品なワンピースを着て、汚れ一つないまっさらな靴をはいている。裕福な家庭で大切に育てられたのだろう。それだけにカバンの言葉が不吉に響く。ESULEは「故郷から追われた者」、GIULIANAは「ヴェネツィア・ジュリアの」という意味だ。

なにを思っているのだろう。伏し目がちなのは悲しいからか、それともただ太陽が眩しいからか。ここでバスが到着するのを待っているようにみえる。それに乗ってどこかへ行き、新しい生活を始めるのだろうか。あるいは正確な行き先なんてどこにもなく、ただここから逃げ出さなければならぬだけかもしれない。

女の子の名前はエジェア・ハフナー。写真が撮影された頃からずいぶん年月がたち、現在は80歳をこえておられる。彼女がどんな女性なのか、どんな人生を歩んでこられたのかは、2022年に刊行された *La bambina con la valigia* (『旅行カバンをもつ女の子』) から知ることができる。ここで紹介するのは、子どもを读者として想定し、やさしい言葉でいいいに書かれたその本の、ある歴史的事件にまつわるページである。

エジェア・ハフナーは1941年にイタリア語とドイツ語を話すバイリンガルの家に生まれた。父方の祖父はブダペスト、祖母はウィーンの出身で、戦争中であるにもかかわらずチョコレートをつっぷり使うザツハトルテを食べていたというから、ずいぶん恵まれた家庭だったのだろう。



【写真をデザインした『旅行カバンをもつ女の子』の表紙】

エジェアが生まれ育ったのはイストリア半島の先端にあるポーラである。ポーラというのはイタリア語の名前で、地図帳などにはクロアチア語でプーラとある。青銅器時代にまでさかのぼる長い歴史をもつ都市で、ローマ時代の巨大な円形闘技場も残っている。19世紀から第一次世界大戦が終わるまで、ハプスブルク家が君臨するオーストリア＝ハンガリー帝国の一部であった。



ポーラを含むイストリア半島とトリエステ、ゴリツァがイタリア王国に併合されたのは1919年のことである。一帯はイタリア語風にヴェネツィア・ジュリアと呼ばれるようになり、24年にはそこにフィウメ(現在はクロアチア語でリエーカ)が加えられた。

第二次世界大戦中の41年、イタリアはドイツとともにユーゴに侵攻し、さらに南のダルマチア地方まで勢力を拡大した。ファシズムの時代、つまりローマ進軍があった1922年から20年以上のあいだ、この一帯に暮らすスラヴ系の人々は「イタリア人化」を強制された。

43年9月8日にイタリアが連合国に降伏すると、ヴェネツィア・ジュリアの都市はドイツ軍に占領され、スラヴ人パルチザンの抵抗運動が激化した。ポーラは重要な港湾都市であったため、アメリカ・イギリス両軍による空爆も凄まじかった。

45年の春、北イタリアの都市がナチスから解放され、戦争の終わりを人々が祝っていたころ、ヴェネツィア・ジュリアでは、撤退したドイツ軍のあと、テイトーの率いるユーゴ軍が各都市を征した。それからおよそ40日後、ポーラはいったん連合国

の管理下に入るが、47年に結ばれた和平条約によってユーゴスラヴィアに譲渡された。

*

まだ領土問題に決着のついていなかった1946年の夏、幼いエジェアは母親に連れられてポーラを脱出した。町が社会主義国ユーゴの一部になることを恐れていた母親が人生ではじめて一人で下した重大な決断だったという。そのころイタリア国内への移住を考えていた他の多くの人たちとはちがって、彼女はサルデーニャに嫁いでいた妹を頼ることができた。

イギリスの首相チャーチルが「バルト海のシュテットインからアドリア海のトリエステまで、大陸を分かつ鉄のカーテンがおろされた」と演説したのは、ほんの数か月前のことだ。いったんサルデーニャに行けば、カーテンの向こう側のポーラにはおそらくもう戻れない。例の写真は、エジェアと母親の二人が旅立つ直前に親戚一同で行われた記念撮影会での一枚である。エジェアによそ行きの格好をさせ頼りにチークまでぬってカメラの前に立たせた大人たちは、永遠の別れを覚悟していたのかもしれない。

*

ポーラやフィウメ、ダルマチアがユーゴに渡ることが決定すると、25万人以上のイタリア系の住民が生まれ故郷から立ち去ることを余儀なくされた。家も財産も何もかもそこに残して、である。エジェアの母方の祖母もそのときイタリアへ移住することを決心した一人で、サレルノの近くの収容施設に入って、そこで10年ものあいだ生活した。オーストラリア政府に難民申請を出していたものの、その希望が叶えられることはなかった。

父方の祖母とおじ、おばはイタリア政府が用意した施設には入らなかった。彼らはボルツァーノに移り、ポーラで営んでいた宝石店をそこで開いた。しかし店はあるが家がないという状況からの再スタートで、夜になってシャッターをおろしたら、店の床にマットを敷いてみんなで雑魚寝するという生活がしばらく続いたという。サルデーニャにいたエジェアがハフナー家に引きとられたのもその頃である。彼女は父方のおばさんを実の母親のように慕って、ボルツァーノで大きくなった。

「ダルマチアとヴェネツィア・ジュリアのイタリア

人が故郷を捨てなければならなかったのは、テイトー政権にファシストと見なされたためだが、イタリアでも同じイタリア人たちからファシスト呼ばわりされた」とエジェア・ハフナーは言う。自身もイストリア半島出身だという理由で差別されたと告白している。通っていたボルツァーノの名門小学校で教師からいじめを受けていたのである。しかし当時は、他の子どもたちはお金持ちなのに自分は学費を納めるのがやっとだということ以外に、自分とクラスメイトを隔てる違いがあるなんて思いもなかったという。

*

ところで、ここまで触れてこなかったエジェアの父親クルト・ハフナーのことである。

エジェア自身は父のことをほとんど覚えていない。戦争中、空襲警報がポーラの町に響きわたるなか、薄暗いシェルターの中で父親といっしょに過ごした時間のことがわずかに記憶に残っているだけだ。

ポーラからドイツ軍が撤退したあとの1945年5月、クルト・ハフナーはユーゴの秘密警察に連行され、それきり家族のもとに戻ってくることはなかった。彼だけではない。テイトーの軍がヴェネツィア・ジュリアを支配していたおよそ1か月のあいだに、エジェアが言うには「イタリア人だというだけの理由で」多くの者たちが捕らえられた。それはスラヴ人による報復だった。彼らは1920年代から長くつづいたファシスト政権のもとで抑圧を受け、そのためイタリアに恨みをつのらせてきたからだ。

囚人となった彼、彼女らは、この地方のあちこちに存在するフォイバ(foiba)とよばれる天然の深い穴の前に連れていかれ、そこで射殺されるか、あるいは射殺された者に引きずられる形で(囚人たちは互いに針金でつながれていた)、生きたまま穴に落ちた。そして落下の衝撃で即死するか、そうでなければ助けがくるのを空しく待ちながら数日後に息絶えた。これが43年の秋と45年の春にヴェネツィア・ジュリアで起きたフォイベ(foibe: foibaの複数形)とよばれる大虐殺事件である。犠牲者の数は3,000とも5,000ともいわれる(注)。

やさしかった父親がもう存在しないことを理解

するにはエジェアはまだ幼すぎた。まして、フォイベの深みの一つに虫けらのように捨てられた事実を受けとめるには、気が遠くなるほど長い時間を要したことだろう。写真の中のまだあどけない女の子を見ていると心が痛む。



【身の回り品をもって脱出する若い女性】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Esodo_giuliano_dalmata

(注)歴史家のラオウル・プーポによると、ユーゴスラヴィアの体制に反対していた者、あるいは反対する可能性のある者を排除することが目的であり、殺害された者の大半がイタリア人であったが、なかにはスロヴェニア人やクロアチア人の反共産主義者もいた。

<参考文献>

Egea Haffner, Gigliola Alvisi, *La bambina con la valigia. Il mio viaggio tra i ricordi di esule al tempo delle foibe*, Piemme, 2022.

Raoul Pupo, *Foibe*, in *Enciclopedia Italiana, VII Appendice*, Istituto dell'Enciclopedia Italiana, 2007.

(元当館スタッフ)

イタリアあれこれ⑤

* たかがアクセント されどアクセント *

杉 栄子

今年 1 月号(386 号)のコレンテで、竹田理乃さんがトールキンのファンタジー小説をベースにしたドラマをイタリア語吹替で見る話をされていたが、私も身に覚えがあることで、とても共感しながら拝読した。私の場合は映画『ロード・オブ・ザ・リング』三部作のイタリア版 DVD。あまりに何度もイタリア語で見たものだから、私にとってガンダルフやアラゴルの声は、演じた俳優の声ではなく、イタリア人声優のそれになってしまっている。イタリアオリジナルの映画やドラマだと方言が混じってわからないことがあるが、吹替だと基本的に方言はないから聞き取りやすく、耳を慣らすにはいい練習だったと思う。そして登場人物の名前のどこにアクセントがあるか問題。イタリア版<ガラドリエル>を初めて聞いた時はそこ！？と驚いた。でもイタリア語発音の仕組みを考えれば、確かにそこだなと納得の位置だった。

それぞれの単語には強調して発音する箇所があって、そこにアクセントがあると言う。イタリア語の場合、単語を音節で区切り、それを後ろから数えて 2 番目にアクセントがあるとか、3 番目にアクセントがあるなどと説明をする。

例えば、イタリア北部にあるファッションの都 Milano を音節で区切ると、Mi / la / no。後ろから 2 番目の音節 la にアクセントがあるので「ミラーノ」というのが正しい発音である。しかし私は留学中、日本で通常耳にする発音で「ミラノ」と言っていたから、現地のイタリア人になかなかわかってもらえなかった。何度か繰り返してようやく「ああ、ミラーノね」と言ってもらえたものだ。ミラノとミラーノって、それほど違わないように思えるのだけれど、それだけでわかってもらえないのだから、イタリア人にとってはかなり違って聞こえるのだろう。ちな

みに後ろから 2 番目の音節にアクセントがあることをピアノ piano と言う。



【ミラーノ】

それに対して、後ろから 3 番目の音節にアクセントがあることをズドウルツッチョロ sdrucchiolo と言う。例としては、イタリア南部の代表都市 Napoli がある。音節で区切ると Na / po / li、発音は「ナーポリ」である。これもまた私は日本式に「ナポリ」と言っていたが、なぜか「ミラノ」よりは通じたような気がする。

必ずズドウルツッチョロで発音すべき言葉としては、動詞の直説法半過去 3 人称複数形の活用形がある。例えば「食べる」という意味の mangiare。活用すると mangiavano、音節で区切ると man / gia / va / no で、アクセントは gia に置き、発音は「マンジャーヴァノ」である。これを間違えてピアノで「マンジャヴァーノ」と発音してしまうと、一文字違いの 1 人称複数形 mangiavamo (マンジャヴァーモ) と混同される可能性があるので注意しなければならない。

逆パターンのエピソードをひとつ。2014 年のサッカーワールドカップで、日本チームを率いていたのはイタリア人のアルベルト・ザッケローニ氏だった。代表メンバーの発表記者会見で、監督自身が選手一人一人の名前を発表した。見慣れない日本人の名前を読むのは大変だっただろうと想像する。イタリア人は知らない単語、地名、人名はピアノで発音する習慣があるので、ザッケローニ監督も「カワシーマ」「ナガトーモ」という風に、後ろから 2 番目の音にアクセントを置きながら発音した。このあたりは誰のことかみな理解できたのだろうが、最後の 23 人目、監督が「オザーコ」と

言った時、居合わせた記者たちはどうやらわからなかった様子で、通訳が監督に繰り返すよう促した。監督が再度「オザーコ」と読み上げ、さらに通訳が「オオサコです」と付け加えることで、大迫選手のことだと理解されたようだった。

なぜオオサコがオザーコになってしまったのか。まずアルファベット表記だと、ふたつある「オ」が「O」ひとつになり、「Osako」と書かれていただろう。音節で区切ると O / sa / ko。そして先ほども言った通り、イタリア人は、知らない単語はピアノで発音する習慣があるので、アクセントは sa に置かれる。また、イタリア北部および中部では、母音に挟まれた S は濁るので <ザ> となる。こういったイタリア語発音の特徴が重なり、「オザーコ」になってしまったというわけだ。もし監督が南部の出身だったら、S は濁らないので「オサーコ」と読んでいただろう。

今年2月、そのザッケローニ氏が自宅で転倒し集中治療室に搬送されたというニュースが流れた。現在はリハビリ病棟へ転院されたとのこと。お元気に回復されることを遠く日本から願っている。



【オザーカ】

さて、私は大阪出身である。イタリア留学中に尋ねられるたび、「ソーノ・ディ・オオサカ」と答えていたのだが、大阪のことを知らないような反応ばかりだったので、京都の隣だよと付け加えるのが常だった。しかしある日、アルファベットで Osaka と書いて見せた時、「ああ、オザーカね！知ってる知ってる！」という反応が返ってきた。そう、オオサコがオザーコになったのと同じ理由で、イタリアでは、オオサカはオザーカと発音されるのだ。そ

れに気付いてから、「ソーノ・ディ・オザーカ」と言えばすぐにわかってもらえるようになったが、自らオザーカと言うのにはなかなか抵抗があった。

通訳ガイドの仕事でも、「オザーカ」という発音によく遭遇する。イタリア人にとってはそれが正しい発音であり、私もそれがオオサカのことだとわかっているので問題はない。でも彼らだけで行動する時など、私の「ミラノ」がイタリアで通じなかったように、彼らの「オザーカ」も通じずに困ったりしていないかと心配になり、<オ>にアクセントを置いて「オーサカ」と発音するんだよと、余計なお世話かもと思いつつ指摘してしまう。

「オーサカ」と読んでもらうにはどう書けば良いか考えてみたことがある。例えば O を 2 個にして「Oosaka」ではどうだろうと思ったが、アクセントの位置は変わらず、「オオザーカ」になるだけだから却下。では O の上にアクセント記号をつけて「Òsaka」と表記すれば正しい発音に近づくのでは？と思った。これなら北部・中部だと「オーザカ」にしかならないだろうが、南部なら「オーサカ」と読んでくれるかもしれない。

一方でイタリア語に面白い定着をしたと思う日本語は「柿」である。イタリアのスーパーや市場で普通に売られているこの果物は、東アジアが原産で、18 世紀に日本からヨーロッパに伝わったらしい。イタリアでももちろん kaki という名前であるが、ピアノな単語としてアクセントは ka に置かれ、「カーキ」と発音される。さらに、イタリア語では語尾が i で終わる名詞は複数形であるので、「ひとつの柿」と言うために単数形 kako (カーコ) が作り出され、日常的に使用されている。外来語の名詞は単数も複数も変化させず同じ形のまま使うのが通常であるところ、「柿」は面白い例だと思う。綴りについても、もともとイタリア語に無かった K の文字を使わずに、イタリア化されて caco / cachi と書かれることもある。

話は変わるが、先日、友人からこんな質問をされた。「カフェラテのラテって、牛乳っていう意味のイタリア語でしょ？でもラッテじゃないの？どうしてラテなの？」そう、牛乳はイタリア語で latte と言い、ピアノなのでアクセントは la にある。発音をカタカナで書くなら <ラッテ> となるだろう。でもカフェや喫茶店のメニューには、真ん中の <ツ> が抜

けて「ラテ」と書かれていることが多い。

このカフェラテとはイタリア発祥の飲み物で、イタリアでは *caffelatte* (カッフェッラッテ)、*caffè latte* (カッフェ ラッテ)、あるいは *caffè e latte* (カッフェ エ ラッテ) と表記される。「コーヒーと牛乳」という意味であるが、このコーヒーはアメリカンでもブレンドでもなく、エスプレッソコーヒーのことなので、エスプレッソに温めた牛乳を混ぜた飲み物のことである。ちなみに牛乳を泡立てればカプチーノになる。

カッフェラッテは、アメリカを経由して、1990年代に日本にやってきた。93年に森永乳業がチルドカップ飲料の「カッフェラッテ」を発売したが、この飲み物が日本で広まったのは、96年に1号店を銀座に出店したスターバックスのおかげだろう。このスターバックスをはじめ、現在では多くのカフェチェーン店が、カッフェラッテのことを「カッフェラテ」あるいは「ラテ」と表記している。目にした当初は、ラッテをラテと書くとは何事かと憤慨・・・することはなかったが、自分が注文する時に「ラテ」と言うことがなかなか出来なかった。どうしてあえて間違った発音をしなければならないんだろう、と思っていたからだ。でも私が「カッフェラッテ」と注文しても、店員さんから「カッフェラテですね」と確認されるだけなので、無駄な抵抗は早々にやめることにした。イタリアで「オザーカ」が定着し使用されているのと同じように、日本ではもはや「ラテ」で定着しているのだから。しかしどうして「ラテ」になったのだろう。

試しに *latte* を英語の辞書アプリで検索して発音を聞いてみたところ、イタリア語の発音とは全然違っていたのでびっくりした。繰り返しになるが、イタリア語では *la* にアクセントをおいて <ラッテ> と発音する。それが英語になると *te* の方にアクセントがあるようで、真ん中の <ッ> も聞こえない。カタカナでむりやり書き表すなら <ラァテェ> となるだろうか。なるほど、英語式の発音をカタカナで表記しようとしたから日本では「ラテ」になったのか、と理由を想像したところで、別の疑問が湧いてきた。

アメリカ式の「ラァテェ」、または日本式の「ラテ」という、アクセントが正しくない発音をして、はたして本国イタリアで *latte* のことだとわかってもらえ

るのだろうか。一緒に YouTube 動画を作成しているアレックスandro先生に尋ねてみたところ、状況によると思うという返事だった。例えばコーヒーが目の前にあって、牛乳を加えるかどうか聞くような場合ならわかると思うけれど、それ以外の状況だと難しいんじゃないかなということだった。

どうやら日本式発音の「ラテ」では、イタリアでは通じない可能性が高そうである。これからイタリアへ旅行に行く方も増えると思うが、カフェに入った際には、ぜひ <ラ> にアクセントを置いて「ラッテ」と発音してください。でも「カッフェ」も言わないと、牛乳だけが出てくることになるのでご注意ください。



【カッフェ ラッテ】

(当館語学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>